

第1回尖石縄文文化賞 受賞者：縄文文化研究会

尖石縄文文化賞条例にもとづく、同賞の選考委員会は、7月8日、茅野市長(矢崎和広)の諮問を受け、全委員出席の下に東京都内で開催された。

今回、選考・審査の対象となったのは、自・他薦を含めて、個人13、団体2の合計15件である。それらの内訳は、地域に根ざして、あるいは在野の立場で考古学に取り組む研究者、地方自治体等で文化財行政や研究を進める研究者、さらに大学等の研究機関に所属する教員や研究員など、きわめて幅広い研究者層を含み、しかも30歳台から60歳台までという厚い年齢層からなっていた。

それに加えて、各個人・団体から寄せられた、「受賞の対象となる研究及び活動の業績」についても、本賞制定の重要な趣旨の一つである、宮坂英弐が実践した地域研究、そして尖石縄文集落の発掘を通じて生み出した、縄文文化・縄文人の歴史の本質に迫る研究をという精神を生かすことを目指し、その上で学界最先端の方法や理論、さらに学際的な資料や視野をとり入れたすぐれた研究・活動であると認められるものがほとんどであった。

このことは本賞の制定趣旨が広く学界等一般に理解され、本賞への評価と意義が定着する基礎として、選考委員会としては、積極的に応募された各位に敬意を表するところである。

以上のような、すぐれた多くの候補者(個人・団体)を得て、選考委員会は慎重な長時間にわたる審議を重ねた結果、全員一致で「縄文時代文化研究会(代表鈴木保彦)」を、第1回尖石縄文文化賞の受賞者として推薦することを決定した。

同会はいまからちょうど10年前の1989年に、数名の若手縄文研究者の発意によって同人組織で創立され、新進気鋭の研究者の全国的な支持を得て、これまでに蓄積された縄文時代文化の研究を批判あるいは評価しながら、さらなる発展を積極的に目論むものである。その成果は毎年定期的に学界誌『縄文時代』の刊行に結実し、すでに11号に及んでいる。

特に、昨年12月刊行の第10号は、『縄文時代文化研究の100年 21世紀における縄文時代研究の深化に向けて』と題する5分冊におよぶ大部の特集号であり、縄文研究の全部門にわたって、よく20世紀の研究史と研究の現状を総括し、次の時代への展望も含んだ重要な業績として高く評価できる。

選考委員会としては、受賞対象として優劣つけがたい幾多の候補の中から、本賞がたまたま新しい尖石縄文考古館のオープンの時に当たって制定されたことに鑑み、とりわけ宮坂英弐が地域の多くの人々と共に考古学を学ぶことを夢みた心をくみ、また賞制定者である茅野市が新しいミレニアムの地域(市)の発展のシンボルとして、「尖石と縄文」を位置づけたことを記念する意味も加えて、21世紀の縄文研究のさらなる発展を、多くの研究者の共同研究で担おうとする、「縄文時代文化研究会」の今後の活動に期待して、同会が尖石縄文文化賞の第1回の受賞に最もふさわしいと判断したものである。

2000年7月8日
宮坂英弐記念尖石縄文文化賞選考委員会
委員長 戸沢充則
副委員長 樋口昇一
委員 小林達雄・佐原真・鈴木公雄

第1回受賞者 縄文文化研究会
(写真は代表の鈴木保彦氏)

